

壮年会だより

平成25年4月度 中原寺仏教壮年会だより Vol.9



【住・職・閑・話】



東京のある名門中学校の入学試験で出題された理科の問題が一部で話題になっています。その問題とはく「ドラえもん」がすぐれた技術で作られていても、生物として認められることはありません。それはなぜですか?>というものです。「ドラえもん」とは子どもに大人気のアニメのキャラクターで、22世紀の未来から現代にきたネコ型ロボットという設定です。

この問題は選択式ではなく記述式で答えなければならず、私ならば「ドラえもんはロボットだから。」と答えてしまいそうですが、これでは正解ではないそうです。実はこの問題以前の出題箇所地球上の生物の特徴として(1)「自分と外界とを区別する境目をもつ」、(2)「自身が成長したり、子をつくったりする」、(3)「エネルギーをたくわえたり、使ったりするしくみをもっている」の三つが挙げられ、ドラえもんは(2)「自身が成長したり、子をつくったりする」の条件を満たしていないことが模範解答だそうです。

インターネット上では「答えが明確に出ない出題は不適切」との批判が出るなかで、後日ある塾で同じ問題を出題したところ、子どもたちからは想像力を懸命に働かせて出題者が予期しなかった答えが出たそうです。この問題を出題した中学校の意図は、「表面的な知識ではなく本質をとらえることのできる視点を持ち合わせているか」を見るのが目的らしいです。私は「ドラえもんはロボットである」という表面的な知識にとどまり、「ロボットとは何か、そもそも生物とは何か」という本質にまで考えが至りませんでした。

物事の本質を見抜くことなく、自分の知識・経験・常識にとらわれて自分勝手な思いの中で判断し、レッテルを張りながら生きている私が、「仏さまの視点(智慧)」によって物事の裏側にあるものに気付かされるのが仏教です。私たちは自分中心のものを見方をしていないか、常に仏教を訪ねていくことを忘れてはいけません。自分を頼りに生きていくことこそが苦しみの始まりであるからです。それにしても近い将来、人間がロボットとどう付き合い、向き合っていくかという議論をするときが訪れるかもしれませんね。

ワンポイント解説

■花まつりとは?

「4月8日の釈尊の誕生を祝って行う法会」のことで、灌仏会(カブツヱ)、仏生会(ブツヨエ)、花祭ともいう。日本では、種々の草花で飾った「花御堂(ハナミドウ)」を作り、中に灌仏桶をおいて甘茶を入れ、中央に誕生仏を安置してひしゃくで甘茶をかける。釈尊誕生の時「竜が天からやってきて香湯をそそいだ」という話に基づくもので、甘茶は産湯に相当する。(参考:「岩波仏教辞典第二版」2010年11月)



新企画

中原寺杯パークゴルフ参加者募集!

今年度の活動の一環として、パークゴルフ大会を下記のとおり開催致しますので皆様のご参加をお待ちしております。


★開催日: 平成25年**5月25日(土)**

★会場: **オスカーパークゴルフ公園(八千代コース)**
八千代市島田台向原1177 TEL.047-488-2195
(国際レデースゴルフ倶楽部内)

★参加費: **2,000円** (ご利用料金・貸し用具・賞品代含む)

★締切日: **5月10日(金)** 詳細は後日参加者へご連絡致します。

★申込先: **080-1130-0739** (山田理事までお申込み下さい。)



編集後記 (平成25年・壮年会4月会報)

お詫び: 誌面スペースの関係上、寄稿文章の一部を割愛させて頂きました。

今回から、「壮年会だより」の編集委員を河合 功をチーフに、杉田善久、福島秀昭、高木史人の新体制で、4月、8月、12月の年3回とさせていただきます。これを機に文字を大きくし読みやすい紙面で発行することになりました。更に多くの方々のご投稿により、充実した内容としたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

春たけなわの日和、皆様にはご機嫌うるわしくお過ごしのことと存じます。

先月11日には、京都西本願寺の東日本大震災3回忌法要をはじめ、全国各地で被災地の一日も早い復興を願う催しが行われました。昨年末誕生した、自民党安倍政権が推進する「アベノミクス」、リスク含みの規制緩和を推進する日銀総裁人事、TPP参加表明、かすむ脱原発論など、手放しでは喜べない社会情勢です。仏陀誕生のよき月、阿弥陀様の本願にお任せする世界をお誓いしましょう。

平成25年度中原寺仏教壮年会活動について



平成25年度中原寺仏教壮年会活動にあたって、昨年、平成24年度の年間活動を振り返りますと、壮年会年次総会から始まり、**2月**には東京教区第32回仏壯連盟結成記念日研修会が千葉県勝浦市で開催され、昨年度は千葉組の担当ということもあって、自分自身も千葉組の一役員として開催までの準備等で忙しい2月でもありました。

3月の春季彼岸会法要・宿縁廊法要・門信徒永代経法要が行われ、**4月**には花まつり・入門式がありました。**5月**には今年度最大イベントとして、親鸞聖人750回大遠忌法要と住職継職慶讃法要が盛大に開催されました。**7月**には第20回中原寺ファミリーパーティー、**8月**は第

17回子ども合宿。**9月**に入り秋季彼岸会法要、**10月**にはバス日帰り旧跡参拝ツアー・第24回中原寺文化講演会、**12月**は壮年会恒例の年末懇親会とあつというまの1年でした。

平成24年度の会員名簿には55名の会員の在籍がありましたが、平成25年度の総会時には47名になり、総会後一人の退会者があり、結局平成25年度の会員数は46名で1年間で9名の退会者が出たことは、自分の力不足があったと反省の1年でもありました。

今年1年間の行事を踏まえて少しでも会員の増加を図ってまいりたいと思いますが、会員一人一人の協力なくして達成は出来ません。今年度の各種行事には積極的に参加を頂ければと願っており、新規行事も取り入れてまいりたいと思いますので、ぜひ暇を見つけてご来寺頂ければと願う次第です。(石井 壮年会会長 記)

3月20日(祝日) お彼岸法要講話「何処へ」

前住職

仏教伝道協会出版の小冊子の記事に、この世に於いてどんな人にも成し遂げられない「5つの壁」があると紹介されています。

- 1、老い行く身でありながら老いないということ
- 2、病むべき身でありながら病まないでいること
- 3、死すべき身でありながら死まないということ
- 4、亡びゆく身でありながら滅びないということ
- 5、尽きるべき身でありながら尽きないということ

世の常の人々は避けがたい事とは知りながら苦しみ悩むのである。仏教の教えを聞くことで「避けがたい事は避けられない」自覚するゆえにこのような愚かな悩みを抱くことはない。

お彼岸、お盆といえど真先にイメージされるのはお墓である。お墓は仏教発祥の地インドにはない。インドはヒンズー教が圧倒的で仏教は3%の普及率しかない。ヒンズー教は死んだ肉体に執着はなく死体は火葬後その遺骨、遺灰はガンジス河に散布して自然に還す事ですべてが終わる。

日本の仏教は、中国経由の影響を強く受け儒教の思想が仏教に取り入れられ先祖崇敬の観点からお墓づくり、申う習慣が古代から継承されてきた。それは、春秋のお彼岸や夏のお盆に先祖を供養する形で連綿と続

いている。お彼岸には亡き先祖への「鎮魂」「供養」「追憶」の3つの事柄が広く遵守されています。

お彼岸は単に死者を弔うことだけではなく、「今日私があることを喜びそれが先祖の皆様のお陰であること」を感謝する契機として欲しいのです。

仏教の基本原理は「空」という概念で成り立っています。「空」とは因縁という関係性の中で一切の事象は生起しているの絶対不変ということはない。また、インド人はまた「ゼロ」という概念を発見した。「0」はすべてのもの起点でありプラスにもマイナスになる無限の広さと包容力を持っています。それは阿弥陀仏の無量寿・無量光に象徴される阿弥陀仏の廣大・無辺の働きに相通ずると司馬遼太郎は記述しています。

帰命無量寿如来とはすべて自分を頼りなさいという阿弥陀仏の呼びかけの言葉です。この阿弥陀仏への信心こそが私を安心させてくれる拠り所です。冒頭の5つの壁に対する不安もこの言葉によって雲散霧消するでしょう。

人気歌手の坂本冬美が歌手を目指して故郷を出た時に、ご両親が言った「いつでも帰っておいで」の一言が不安な世界へ旅立つ勇気づけの言葉であったと述懐しています。(河合 照夫 記)

第33回

【東京教区仏教壮年会連盟結成記念日研修会に参加して】

(平成25年2月23日(土)・24日(日) / 箱根湯本：ホテルおかだ)

参加者：石井 保・藤田 治雄・麻木 隆一・奈良 徳弥・村田 太喜夫・越田 修二郎・福島道宏

お天気に恵まれた2月23日・24日、神奈川組担当による第33回東京教区仏教連盟結成記念日研修会が、箱根湯本の「ホテルおかだ」で開催されました。中原寺からは石井・藤田・麻木・奈良・村田・越田・福島（酒飲み軍団？）7名が出席し、参加者320名が集う大会となりました。

13時30分に開会式が始まり、教務所長の藤井純恵氏より今の時代、ご法義が伝わりにくい世の中ですが、仏教が危機意識を持って活動していかなければとのお話でした。

また先般、東京教区の寺院仏教100単位結成の目標が達成したとの報告がありました。

記念法話は、東京仏教学院講師、藤田恭爾師による「後生の一大事」と題して私のいのちのゆくえについて、浄土とはある無ではなく、無くてはならない世界であるとの話が印象的でした。

2日目は、早朝露天風呂でさっぱりした後の晨朝勤行は、広い会場に響き渡る読経に、こころ洗われる感動をおぼえました。

10時からの記念講演は、女流講談師：一龍斎春水（はるみ）師による絵解き講談「親鸞の妻恵信尼」が口演されました。

恵信尼が残した10通の手紙から創作されたもので、夫親鸞聖人との出会いから90年の生涯を終えるまでの様子を恵信尼の一人語りの形式で口演されました。

講談を生で聴くのは初めての経験でしたが、強弱をつけた滑舌明瞭な語りと臨場感ある話芸に聴き入りました。

最後に次回開催組の埼玉組仏教連盟会長より挨拶があり11時30分閉会しました。帰り道、開店間際のそば屋でおいしいお料理と地酒をたっぷり頂きほろ酔い気分が帰路につきました。

おかげさまで有意義な2日間でした。合掌（福島 道宏 記）



研修1日目 ◆記念法話「後生の一大事」藤田 恭爾 師

法話のなかで自身の実話からお話しされた中から印象に残った2点の要旨を述べます。

1. 浄土とはなくてはならない世界

父親は小学6年生の時に関東大震災で母と祖母、姉と弟の6人を失った。

父親はわずかな建物の隙間に救われた。残されたのは祖父と父親の二人だけとなった。

それから中学卒業までの間、祖父は毎日お弁当を作ってくれた。卒業の時、おめでとう、よく頑張ったねという祖父からの祝いの言葉を期待したが「明日から、お弁当を作らなくて済むのだね」という言葉に失望した。が、間もなく、祖父は震災で亡くした祖母への「お前のお影でなんとかお弁当を作るご用を果たすことができたよ。ありがとう」がいたかったと語ってくれた。まさにお念仏の心だ。祖父が他界して間もなく「恭爾、ご浄土の父にお弁当のお礼を言っていないのだよ。だからお浄土は私にとってなくてはならないのだ」と父は私に言った。

2. 同体の大悲

すべてをつつみこんだ阿弥陀様のお慈悲。悲しいでしょうね、苦しいでしょうね、さびしいでしょうねとわたしと一体となって受け止めてくれる心が阿弥陀様の心、お念仏の心である。

「守るといことは伝えていくこと。ひとりひとりが浄土真宗のみ教をどう伝えていくのか。併せて単位組の仏教の活動の活性化が問われている時代だ」とのご講師の強い言葉に気持ちも引き締まりました。諸事万端スムーズに進めていただいた石井会長、村田副会長ありがとうございました。楽しい研修旅行でした。（麻木 隆一 記）



研修2日目 ◆記念講談「恵信尼」一龍斎 晴水

研修2日目、絵解き講談ということで親鸞の妻「恵信尼」を一龍斎晴水が演じました。映像を映すプロジェクターも3台会場に用意されており、要所要所に映像と客観的なナレーションが入る構成です。一龍斎晴水とは人間国宝の一龍斎貞水の弟子で、平成16年に真打ちになっておられますが、もともと声優からスタートされた方で、宇宙戦艦大和のヒロイン森雪や、銀河鉄道999のガラスのクレア、またおぼけのQ太郎のユカリちゃんなどを演じていて、声優女性の部で3年連続1位となった経歴ももっておられます。講談でも新作講談を中心に「金子みすずの生涯」「中村久子伝」など仏教に縁のある題材もてがけておられ今回の演目に繋がりました。親鸞の妻「恵信尼」の十通の手紙が大正十年に本願寺で見つかり親鸞の存在が確認されたことは、歴史的に非常に大きいことであり、親鸞の奥さんの生涯を語ることは意義あることかもしれません。親鸞が我々の一員として家族を持ったということは、有り難いことですが、手紙の内容からも妻の恵信尼も娘の覚信尼も親鸞の信心を理解していたわけではないと思われまふ。親鸞は自分の考えは語りましたが自分の送った人生は語りませんでした。それが親鸞さんです。親鸞伝絵は三代目覚如の生活の為には致し方なかったかもしれませんが、親鸞の教えを広めるにあたって必ずしも必要とは思われまふ。二十年の歴史ある神奈川組の依頼で作られたとのこと、真宗の演目としては違和感を感じまふが、1日目お話しされた藤田恭爾住職に浄土についてもう1席頂戴したかった感もいたしました。（越田 修二郎 記）

